

6

縄文時代のこころ

■土器に込めた人びとの思い

縄文時代中期の文化の特徴として、日常の生活ではあまり使われな
い道具の発達があげられる。自然と共存しながら生活していた縄文時
代の人びとは、自然界のあらゆるものに霊の力を認め、それらを崇め
ていたと思われる。そのようなところをしのばせるものには、土器に
つけられた装飾や土偶、石棒など数多くあり、長沢遺跡からも、各種
のものが出土している。



人面把手(勝坂式・2次調査出土)

顔面装飾(勝坂式・9次調査出土)
これは立体の把手となる以前の勝
坂式期初期の装飾で、貴重な資料
である。

蛇体把手(勝坂式・6次調査出土)

縄文土器は、抽象的文様の繰返しで器
の表面を飾るものが多いが、中期の勝坂
式期には、縁や把手に写実的表現がみら
れるものがある。人面付き把手土器とよ
ばれるものはその一例で、この土器は祭
祀儀礼などと深くかかわっていたもので
あろう。そこにみられる装飾は、人びと
の信仰する神の姿や、呪術を行う人物を
あらわしたものと思われる。



器台形土器(勝坂式・8次調査出土)



器台形土器(勝坂式・8次調査出土)



有孔鏝付き土器(勝坂式・8次調査出土)

■特殊な道具

またこの時期、中部山岳地域から関東西部の地域にかけて、蛇をモチーフとした装飾をもつ土器が多くみられる。長沢遺跡からは、三角形の頭と大きく開いた口、するどい目をもった、マムシをかたどったものと思われる土器の把手が出土している。人びとにとってマムシは恐ろしい存在であり、一瞬にして命を奪う力と、その強い生命力にあやかろうとして、神と崇め、祈りを込めて土器に装飾したものであろう。

このような特殊な文様をもつ土器のほかに、器の縁の部分に穴が並ぶ有孔鏝付き土器や、ものを置く台のような形をした器台形土器、超小型のミニチュア土器などがあげられる。有孔鏝付き土器は、果実酒などの醸造に使われたという説や、太鼓として使われたという説などがあり、器台形土器は、その形から土器の製作台や、お供え物をした台として使われたのではないかと考えられている。またミニチュア土器は、子どもの玩具とも思われるが、かなり精巧につくられているため、祭りの際に使われた道具の一つではないかとも考えられる。こういった土器は、日常生活に使われるものではなく、祭りや祈りなどの儀礼に使われるものと思われる。



ミニチュア土器(勝坂式・8次調査出土)



土偶(9次調査出土)



土偶(9次調査出土)



2号遺跡出土石棒 この石棒は江戸時代の玉川上水開削のときに出土したもので、長さ105cm。近くで遺物の出土は確認されておらず、単独で出土した。

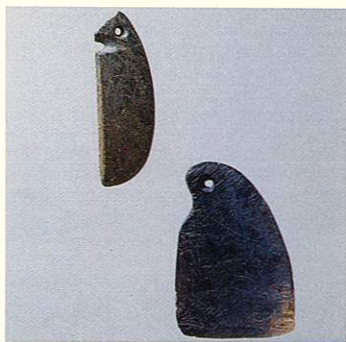
ころから、出産の無事を祈ったり、女性の豊かな実りを願ってつくられたものであろうか。これら土偶の多くはこわれた状態で出土するが、儀礼の際にこわしたものであろう。無事出産したことによって、役割が終わった土偶はこわされたのであるか。あるいは、こわすことによって新しい生命の誕生を祈ったのであろうか。

これに対して石棒は、石を材料とし、磨いてつくられたもので、男性をあらわしている。これは狩

このように
祭りや儀礼に
使われたと思
われる道具の
なかでも、も
っとも特徴的
なものが土偶
と石棒である。
土偶は土でつ
くられた人形
で、その大半
が女性の妊娠
した姿をあら
わしている



土製円盤 土製円盤は縄文時代の各時期、各地域にみられるもので、大きさは大小様々である。土器片を丸く整形しており、玩具や装身具に使われたといった説がある。



装身具(8次調査出土) 住居跡内から出土した装身具で、ともに耳飾りの欠損した物を再利用した、首飾りと考えられる。



耳栓(9次調査出土) 縄文時代の装飾具の一種で白の形をした耳飾り。住居跡内から出土した。



スタンプ形土製品(9次調査出土) 縄文時代に使われた小型の土製品で、つまみ状の突起があり、スタンプに形状が似ていることからこの名前がある。装飾品なども考えられているが土製円盤と同様くわしい用途は不明である。

か。

狩活動の成功など、男性的な活動にかかわりのある祭りの道具であったと考えられる。これらの石棒は、縄文時代中期後半には大型で屋外に祀られている場合が多いが、後期になると小型となり、屋内にもち込まれるようになっていく。

縄文時代には、こういった特殊な道具を使って生産活動の成功を祈ったり、また死や再生に対する呪術も行われていたと思われる。中期後半の加曾利E式期になると、竪穴式住居の出入口の床下に、埋甕まいようとよばれる土器を埋めた施設がしばしば見受けられる。はつきりとした用途は不明だが、幼児の遺体や死産児、また胎盤をおさめたものと想像されており、死者に対する呪術との関連性が考えられる。これを母親が踏みまたぐことによつて、死んだ子供の霊が母の胎内に戻り、新しい生命がささかると考えられていたのであろうか。子供の健やかな成長を願う呪術であったのであろうか。